

100キロマラソンじゃあ〜なる

5237

997-0826 鶴岡市美原町30-24

☎0235(22)3669

090-2986-7724 携帯



塞

1984年9月15日第1号発行〜

2009年11月11日

ジャーナルを発送する際は殆んど記念切手を貼って郵送するよに心掛けている。せつかく届く手紙に通常切手では無味乾燥を感じるからだ。郵便会社も最近では何かと理由をつけて記念切手を発行しているが、この切手は殆んどが死蔵されている様だ。折角買った記念切手が全く使用されないことは不幸なことだ。近年はひと昔前と異なって記念切手の投機的価値が全く無いに等しいのに...。切手を使用しないのは日本郵便の思ひ壺、記念切手を大量消費して思惑を外してやりますよ！個人で蒐集する切手の価値は殆んど額面以下です。記念切手を使って小生宛に手紙下さい！ね。

晴れ、降ったりと寒暖がめまぐるしく交代。久しぶりの晴天をホノルルへの練習のつもりで20キロペース走を敢行する。今更になつてこの練習が岩を得たものは疑い無いが、途中で大幅なペースダウンが来たのが下の、ますますと致しましょう。ホノルル本番での時差ボケと現地へ着いてからの体調が普通程度であれば何とかサブ4は狙うことができるかも知れません。など甘い考えが頭を抬げてきました。折角の南国遠征だし、時間に拘泥しないでかっ手片手にレスを愉しむことも視野に入れて残り1ヶ月過ぎても良いかな？ホノルルもさりながら、来春2月の東京マラソンが自分自身の初レースに本子なので、どちらの方をタイム意識したレースにしようか良いのかも知れません。今シーズンは4月15日時間走も、厳寒走り込み大会も両方いを入れて取り組みたい。現時点では思うところです。 11月10日

NYC マラソンを走ってきました。

11月1日(日)、大会当日午前2時、今年は丁度サマータイムが切り換わる日と重なり時計を1時間遅らせることに、その分何となく気分が楽になって前日はぐっすり眠れた。目覚めれば外は雨。天気予報では晴れてくるとはいうものの百円カップを着てホテルを5時出発。今年からアーリースタートも一般もバスは同じのことで、かなり早い時間のマンハッタン出立となり、バスがスタート地点に到着したのは7時前、スタートの10時20分までにはまだ3時間半もある。雨は止まず肌寒い。

今回はOさん(視覚障害30代男性、初レース)の伴走、私と現地在住の伴走者Sさん(30代男性)と3人でチームを組んで走ります。スタート地点にはアキレス専用テントが設けられていて雨風がしのげるだけでも助かるし専用の障害者トイレがいくつも設置されていて長い列に並ばないだけでも有り難い。テントの中にはコーヒー、マフィン、ベーグル等がふんだんに用意されていて自由に食べられる。

9時過ぎには荷物を預けなければならない。スタート地点は海辺なので風が強く冷たくつらい。沢山脱ぎ捨ててある衣類の山から現地伴走者の方が次々と拾ってきてくれ急遽それをかぶったりして寒さをしのぐ。そうこうしている内に雨も上がり気温も上がってきて走るには丁度いい。一般のスタートは、9時40分、10時、10時20分と、3ブロックに分かれてのウェーブスタート、私達は10時20分スタートで最後の組。さあスタート、これが以外にスムーズに人がばらけた。2キロ以上もある長い橋は風がもろに当たりゼッケンがブルブルと音を立てるほど強い。最初半袖で走ろうとしていたのが風が余り強いので下に薄いウィンドブレーカーを着たのが正解だった。橋を抜けてブルックリンに入ると風はなく穏やかなマラソン日よりという感じになった。

名前を大きく書いたゼッケンを3人共胸と背中につけて沿道にアピールする作戦。沿道から大きな声で名前を呼んでくれる、その度にThank you!と手を挙げて応える。又世界中のアキレスランナーが同じTシャツを着て走るので、私達には「キリー」と聞こえるのだが、Go Achillies!(アキレス頑張れ)の声援は大きくとぎれない。給水は2マイル毎に水とゲータレードで食べ物はないが沿道から子供達がキャンディー、ヌガー、チョコ等を差し出してくれる。が、私は手を出さない。過去何回も空腹に負けて食べた結果がいつも後悔...甘すぎるのだ。キロ7分10くらいで走ろうとSさんがGPSで1K毎のタイムをチェックしているのだが、初レース、もの凄いな応援、名前まで呼ばれる...となればOさんもハイテンションになるというもの、時々ピュ〜っと早くなってしまう。

暫くするとアーリースタートした仲間のHさんチームに会う。Hさんは交通事故で車椅子生活なのだがその日常使う車椅子で動く方の足で地面をけて進んでいるのだ、10時間以内を目指すという。ハーフ付近では今回応援参加のMさんがコースまで飛び出して声援してくれ、その後Hさんチームと合流して残り半分のコースを一緒に歩いたという。NYCマラソンはそんなことも出来てしまうのですね。ファーストアベニューに入って耳が痛く

5238へつづく

100キロマラソンじゃあ〜なる

5238

1984年9月15日第1号発行〜

997-0826 鶴岡市美原町30-24

☎0235(22)3669
090-2986-7724 携帯

2009年11月13日



黄色の楓、赤色の栂、鮮やかな金色の銀杏が雨に濡れた坂道を賑やかに彩る。自由気儘に野原や短が過ぎる上り坂を、時には蒼空と流れる雲を見上げ、短かい秋を惜しむように進む。刈田の畔からは時機を逸した虫皇のろのろと跳び、帰りを止めた

いつもたかさんのバーカと読んでたきりて
誠に有難うございます。本巻の九州
街道と歩く記事は、車の運転する仕事のため
ではある場所が、歴史に興味がある
ので、果敢と拝読させていただきます。

♪〜♪まで(の時間、鶴岡に用が済)
帰省(三川の温泉、若林、八幡の川)
川にまた最初私の事をあれ? だいた

川に不思議な顔をしてきた。芒川流れ
のハブ、出るまで、出たか? と詰めた。
川手前、急激な昇りがあり、心臓破りの坂
たか、坂が苦手で迷ってます。

東京マラソンを走らせたこと、さあ、
相次ぎに行きた。と、うたが、ハブの
ふかや、ハブに参考する。と、い、
御健闘お祈りします。 鯨ノ野

赤トボがふわ〜と遊んでる。
本格的な冬到来までの末の間の
秋が、いま去ろうとしています。
霜月12日

尚、現時点での3時間ラン(1/23)参加
予定者並びに厳寒を乗り越えたい
以下のようになっています。

＜3時間走＞ 敬称略
伊藤徳理 若林章 宮守恵里 作藤善美
作藤弘美 相谷剛子 奥山夏樹 中野俊一
門向久幸 加藤久美子 伊藤幸 岩浪悦子
木村光希 足田洋昭 作藤純子 菊地光男
作藤佑樹 作藤千帆
大谷葉子 押井弘 石川行徳
石川さつき

＜厳寒を乗り越えたい＞ 1/4〜1/2
宮守恵里 岩浪悦子 山本正勝(鶴)
加藤善宏 若林章 一原正明(北海道)
加藤久美子 中野俊一 牛田篤(道)
野村経一 門向久幸 菊地光男
小松智弥 大谷葉子 木村光希
石川さつき

宮守のNYCマラソン(5237)からの続き

なるほどの声援に応えながら進んで行くと、やはり仲間のKさんチームに会う。ナントKさんは女性の視覚障害者で75歳、NYCマラソンは12回目という猛者、その走り(歩き?)は気迫さえ感じ、現地在住の伴走者が沿道に向かって「皆さ〜ん、こちらは75歳で……」と大きな声で言うと声援はうねりの様になってもの凄いものだった。日本の偉大なランナーとして現地でも有名なのだ。8時間くらいでゴールした由。

ファーストアベニューを北上してブロンクスへ、この辺りが随分変わったと思う。初めて来た86年(菊地さん、五十嵐さん、坂井さんと一緒に)はハーレムへ入ると窓やドアが壊れたままのビルがあつて殺伐とした感じだったのが、現在は高層の公営住宅が建ち並びこざっぱりしていた。長蛇の列だったトイレもここまで来ると並んでいない、3人共同のように我慢をしていた様で同時に「トイレ!」とせつぱ詰まって言ったのがおかしかった。Oさんは35K過ぎる頃からはいよいよ辛くなってきたようだ。初めてのレースなのでとにかく歩かないでゴールさせたい、ペースを落として走ろう。再びマンハッタンに入ると和太鼓の演奏、確か毎年同じ場所で応援してくれる大集団なのだ、力をもらう有り難い。

セントラルパークに入ってからアップダウンが続く。40キロを過ぎていよいよOさんは辛くなってきた。立ち止まってストレッチをする、暫く走り又ストレッチ・・・とゴールまで7回繰り返すことになるのだが「歩かない!」。ゴール近くなって更に声援は大きくなりゴールのアナウンスが聞こえてくるが、Oさんはゴールまで400メートル、100メートルでもストレッチ、私は必死で太股をさする、100メートルで立ち止まりストレッチを始めた時は近くの人達が声を揃えて名前を呼んでくれ、何やらそれが歌の様に大きな声となってくる、私もウルツとしながら3人で手をつないでのゴールとなりました。ゴール後Oさんは肩を貸さないと歩けないほど、そして放心状態。メダルをかけてもらい、防寒用のシートをもらい、食料をもらい、時間をかけてアキレスのブースへ。辛かったけれど走りきった喜びがおそってくるのかOさんは「歩かなくて良かった〜」「良く頑張った」と独り言の様に繰り返し椅子にすわっても放心状態。ホテルへ帰る道すがら「僕は今日のことは一生忘れない」と繰り返す。5時間16分、いい走りだった。

初レースを大事にしてあげたかった。そんなOさんを伴走出来て私も大きな感動をもらったし一人で走るより喜びも倍なのを実感している。又素晴らしい思い出が出来ました。人を褒める文化、NYは魅力的な街、元気にしてくれる街、又すぐにでも行きたいそんなところ。1週間経った今もあの感動を反芻しながらとてもいい気分です。

Thank you, New York!